

女性と金槌

Joëlle DUPLAY (ジョエル・デュプレイ) (C. N. R. S 研究員)

フランス科学研究院 (C. N. R. S) と日本学術振興会との交換協定に基いて、私は、現在飯山教授の研究室に来て研究をしております。地質学を専攻し、2年前に地球化学研究員として、C. N. R. S に入りました。

世間は、地質学者というとハンマーを手に、山野をのし歩きたくましい男を想像し、女性を想像してくれません。地質学は長い間“男の学問”と考えられていたのですから無理はないでしょう。しかし、この学問も他の分野と同様、広い活動領域を含んでいます。ある専門ではフィールド作業が主となっていますが、研究室での仕事が主要活動になっている部門もあります。地質学も、他の分野と同様、化学、物理、情報科学の助けを必要とする事が多くなって来ています。フィールドの作業の重要性は変わらないのですが、研究室でやらないてはならない仕事がふえて来ています。

地質学を専攻する女子学生が増えて来ていますが、これは、この学問の傾向が変わって来たためで

はないように思われます。フィールドを主とする分野でも、研究室での仕事が主となっている分野でも、女子学生の数はふえています。とはいうものの、フランスで女性研究者は、鉱物学、地球化学、古生物学の分野に多く見うけられます。

このことは、女子学生がこれらの専門を好んでえらぶというよりは、鉱床、石油探査のように、社会が男性を選択的に採用する分野が少からずあるということによると思われます。

フランスの場合、一般企業はまだ職業と性別について大変保守的で、女性をどしどし採用し始めた政府機関や国営企業の傾向とかなり異なっています。“女性の社会的地位の向上”について、フランスはまだ米国やスエーデン程には進んでいませんが、目に見えて近づいています。

滞日の期間も残り少なくなりましたが、漸く慣れて来た日本をもっと味わって理解したく思っております

(訳 飯山)